

## 都市部のひとり暮らし高齢者における孤独感の関連要因

安藤孝敏<sup>1)</sup>, 小池高史<sup>2)</sup>, 高橋知也<sup>3)</sup>

## Correlates of loneliness among the elderly living alone in an urban area

Takatoshi Ando, Takashi Koike, Tomoya Takahashi

## 【抄録】

**目的:** 本研究の目的は、都市部に居住するひとり暮らし高齢者に対して簡便な AOK 孤独感尺度を用いて孤独感の測定を行い、孤独感の関連要因を検討することであった。

**方法:** データは横浜市に居住するひとり暮らし高齢者 1,620 人を対象として郵送法により実施された調査から得られた。調査項目は、AOK 孤独感尺度、基本属性と健康度、団体などへの参加を含む社会関係などであった。調査対象者の 41.4%にあたる 671 人から回答が得られた。

**結果:** AOK 孤独感尺度の  $\alpha$  係数は.89 と高い値であり、信頼性が再度確認できた。階層的重回帰分析の結果、男性、学歴の低い者、仕事なしの者、健康状態がよくないと評価した者、近所づきあいなしの者、別居子家族および友人と会う頻度が少ない者で AOK 孤独感尺度の得点が高かった。男女別の分析で共通して関連が認められた変数は友人と会う頻度であった。

**結論:** 本研究の結果から、ひとり暮らしの原因やそれに至る過程に孤独を強く感じさせる原因があること、ひとり暮らし高齢者においても選択的で互報的である友人関係の多寡が孤独感と関係することが分かった。

**【キーワード】** 孤独感, ひとり暮らし高齢者, 関連要因, ソーシャル・ネットワーク

高齢者の孤独感とは well-being の重要な指標 (Larson, 1978) であり、孤独感とその関連要因を明らかにすることは社会老年学において大きな課題であるといえる。一般に、高齢者は他の年齢の人たちに比べて孤独であり、特にひとり暮らし高齢者は孤独であると思われる。しかし、孤独感を最初に定義して、体系的に孤独感の研究に取り組んだ Peplau & Perlman (1982) は「高齢者＝独居＝孤独」という三段論法が誤っていると主張している。また、藤原 (2012) は、ひとり暮らしによって孤独感が強くなるという説を裏づける実証研究はほとんどないこと、アメリカの研究ではひとり暮らし高齢者は孤独ではないことが明らかにされていると指摘している。この報告の中で、数少ない日本での 8 つの研究成果をとりまとめて高齢者の孤独感の強さを評価しているが、高齢者が孤独感を感じているという結論は下せないし、高齢者の孤独感が他の年齢に比較して必ずしも強いとは言えないと述べている。在宅高齢者における孤独感の関連要因を検討した長谷川・岡村・安藤・児玉・古

1 横浜国立大学教育人間科学部

2 日本大学文理学部

3 横浜国立大学大学院環境情報学府

谷野 (1994) では、ソーシャル・ネットワークが孤独感に影響を及ぼし、その中でも特に、友人との関係が強く影響すると報告されていた。友人との関係は、兄弟や親戚よりも選択的かつ多様で、互報的な交換 (reciprocal exchange) を多く含み、高齢者の孤独な不満足感を低めるという研究結果と一致すると考察されていた。このように、日本においては高齢者の孤独感を検討した研究は多くはなく、特にひとり暮らし高齢者の孤独感に的を絞った研究はほとんどないというのが現状であろう。

孤独感に関するこれまでの研究の多くは、Russell, Peplau & Cutrona (1980) が開発した改訂版 UCLA 孤独感尺度を使用している。これは 20 項目からなる尺度であり、4 件法で回答するようになっており、20 点から 80 点の範囲の合計得点で孤独感の多寡が評価されるようになっている。尺度の開発により孤独感の研究が進化したのは事実であるが、改訂版 UCLA 孤独感尺度には次元性 (単次元か多次元か) の問題、信頼性と妥当性の問題、項目表現の方向性と孤独感の区別の交絡の問題などが指摘されている。最近、上記の諸問題を解決するために、第 3 版の UCLA 孤独感尺度が作成され (Russell, 1996)、その後日本語版も作成されている (舛田・田高・臺, 2012)。しかし、高齢者を対象とする大規模な調査では、20 項目であっても多いといえ、より少ない項目で孤独感を評価する尺度が望まれる。安藤・長田・児玉 (2000) は改訂版 UCLA 孤独感尺度をもとに、大規模な調査にも容易に使用できる簡便な 10 項目からなる AOK 孤独感尺度を作成し、中高年の孤独感の関連要因も検討し、この尺度の信頼性と構成概念妥当性について確認していた。

これまでに指摘したことを踏まえて、本研究では、ほとんど検討されていないひとり暮らし高齢者の孤独感を明らかにすることを目的とし、都市部に居住するひとり暮らし高齢者に対して簡便な AOK 孤独感尺度を用いて孤独感の測定を行い、孤独感の関連要因を検討することであった。

## 方法

### 1. データ

本研究で用いたデータは、横浜市に居住するひとり暮らし高齢者 1,620 人を対象として郵送法により実施された調査から得られた。調査対象者の選定は、住民基本台帳によりひとり暮らしと思われる 65~79 歳の高齢男女を横浜市内の 1 地点あたり、性・年齢階級 (5 歳きざみ) 別にそれぞれ 30 人、計 180 人を抽出することにより行った。地点選択は対象人口による等間隔抽出によって決定したが、予定していた横浜市内の 10 地点のうち、1 地点において抽出作業ができなかったため、最終的に抽出できた調査対象者は 1,620 人であった。調査票は 2014 年 12 月上旬、委託調査会社より発送した。調査票の返送期日は 2015 年 1 月 10 日であったが、回収状況を考慮して 1 月 20 日まで延期し、葉書による回答の督促を行った。その結果、1,620 人の調査対象者の 41.4%にあたる 671 人より回答が得られた。

### 2. 調査項目

調査では、基本属性として性、年齢、学歴、配偶関係、ひとり暮らし年数、住居の種類、仕事の有無、暮らし向きを尋ねた。学歴は最終卒業学校を尋ね、標準的な就学年数に換算した。暮らし向きは経済状況に関する主観的評価について 5 件法 (「大変ゆとりがある」~「大変苦しい」) で回答を求めた。健康度については健康度自己評価を用い、4 件法 (「よい」「まあよい」「あまりよくない」「よくない」) で回答を求めた。

社会関係 (会や団体などへの参加を含む) に関する項目は、近所づきあいの程度、自治会などへの参

加の程度，グループ活動への参加の有無，別居子家族と会う頻度，友人と会う頻度を尋ねた．近所づきあいの程度は，4件法（「訪問」「立ち話」「あいさつ」「つきあいはない」）で回答を求め，「あり」と「ない」の2つ選択肢に整理した．自治会などへの参加の程度は，4件法（「とても積極的に参加している」～「ほとんど参加していない」）で回答を求め，「参加している」と「参加していない」の2つの選択肢に整理した．別居子家族と会う頻度，友人と会う頻度については，「まったくない」～「週に6，7回（ほぼ毎日）」の8つの選択肢に，該当する人が「いない」を加えて尋ねた．

孤独感については，10項目からなるAOK孤独感尺度（安藤他，2000）を用いた．本尺度の得点範囲は0～10点であり，得点が高いほど孤独感が強いことを表す．無回答が2項目以内の場合には，当該項目について「孤独を感じる」方への回答をしたものとみなして再コードし，尺度得点を算出した．無回答が3項目以上の場合には尺度得点を欠測とした．なお，この尺度は中高年を対象に実施された調査において，単次元の等質な項目で構成されており，その妥当性と信頼性が確認されている（安藤他，2000）．

### 3. 分析

孤独感の関連要因の分析には階層的重回帰分析を用い，AOK孤独感尺度の得点を従属変数，独立変数として，第1段階で基本属性と健康度に関する変数，第2段階で社会関係に関する変数を投入した．第1段階で投入した変数は，性，年齢，学歴，配偶関係，ひとり暮らし年数，住居の種類，仕事の有無，暮らし向き，健康度自己評価の9変数であった．第2段階で投入した変数は，近所づきあいの程度，自治会などへの参加の程度，グループ活動への参加の有無，別居子家族と会う頻度，友人と会う頻度の5変数であった．性，配偶関係，住居の種類，仕事の有無，暮らし向き，健康度自己評価，近所づきあいの程度，自治会などへの参加の程度，グループ活動への参加の有無はダミー変数で表し，「男性」「離死別・配偶者あり」「持ち家」「仕事あり」，「ゆとりがある」，「健康状態がよい」，「近所づきあいあり」「自治会などに参加している」「グループ活動に参加している」に1を与えた．別居子家族および友人と会う頻度については，「まったくない」と「いない」を0，「月1回よりすくない」～「週に6，7回（ほぼ毎日）」に1から7の数値を割り当てた．階層的重回帰分析はすべての変数で欠測のない者としたので，分析対象者は587人（男性279人，女性308人）であった．

### 4. 倫理的配慮

調査への協力は回答者の自由意志であり，回答しなくても不利益などを被ることはないこと，回答は統計的に処理され，調査結果から個人が特定されることはないこと，調査内容および個人情報，調査主体と委託調査会社が責任をもって管理し，研究目的以外に利用することがない等を依頼書および調査票の表紙に明記し，回答をもって同意したものとみなした．

## 結 果

### 1. 回答者の特徴

回答者の特徴は表1の通りであり，回答者の性別内訳は男性329人（49.0%），女性342人（51.0%），平均年齢は72.1歳（男性71.8歳，女性71.4歳）であった．一人暮らしの高齢男女には，配偶関係に違いがみられ，男性では離別（33.4%）と未婚（31.9%），女性では死別（65.7%）が多かった．また，住居の種類についても違いがあり，持家（分譲マンションを含む）の割合を見てみると，男性で

表1 回答者の特徴

		男性 (n = 329)	女性 (n = 342)	全体 (n = 671)
年齢 (平均±標準偏差)		71.8±4.27	71.4±4.25	72.1±4.27
学歴	小学校	2 ( 0.6)	0 ( 0.0)	2 ( 0.4)
	中学校	68 (21.5)	59 (17.5)	127 (19.4)
	高等学校	116 (36.6)	191 (56.7)	307 (46.9)
	短期大学・専門学校	21 ( 6.6)	65 (19.3)	86 (13.1)
	大学	105 (33.1)	20 ( 5.9)	125 (19.1)
	大学院	5 ( 1.6)	2 ( 0.6)	7 ( 1.1)
配偶関係	既婚	15 ( 4.6)	5 ( 1.5)	20 ( 3.0)
	離別	109 (33.4)	65 (19.1)	174 (26.1)
	死別	98 (30.1)	224 (65.7)	322 (48.3)
	未婚	104 (31.9)	47 (13.8)	151 (22.6)
ひとり暮らし年数 (平均±標準偏差)		17.3±16.04	13.5±11.81	15.4±14.17
住居の種類	一戸建て持家	77 (24.4)	113 (33.5)	190 (29.1)
	分譲マンション	76 (24.1)	123 (36.5)	199 (30.5)
	公営・公社等の賃貸住宅	36 (11.4)	36 (10.7)	72 (11.0)
	民間の借家	35 (11.1)	20 ( 5.9)	55 ( 8.4)
	民間のアパート	79 (25.0)	37 (11.0)	116 (17.8)
	その他	13 ( 4.1)	8 ( 2.4)	21 ( 3.3)
仕事 あり		107 (33.0)	86 (25.2)	193 (29.0)
暮らし向き	ゆとりがある	49 (15.4)	61 (18.0)	110 (16.8)
	ふつう	181 (56.9)	203 (60.1)	384 (58.5)
	苦しい	88 (27.7)	74 (21.9)	162 (24.7)
健康度自己 評価	よい	78 (23.8)	91 (26.7)	169 (25.3)
	まあよい	165 (50.3)	186 (54.5)	351 (52.5)
	あまりよくない	65 (19.8)	52 (15.2)	117 (17.5)
	よくない	20 ( 6.1)	12 ( 3.5)	32 ( 4.8)

( ) 内は%

は 48.5%、女性では 70.0%であった。これらの差異は、ひとり暮らしの原因やそれへの過程が男性と女性で違うことを示している。

## 2. AOK 孤独感尺度の信頼性

AOK 孤独感尺度の信頼性係数 ( $\alpha$  係数) を算出したところ、.89 であった。10 という項目数を考慮しても、これは十分に高い値であり、この尺度がひとり暮らし高齢者においても十分な信頼性を有することが再度、確認できた。

## 3. ひとり暮らし高齢者の孤独感

表 2 に示したように、ひとり暮らし高齢者の AOK 孤独感尺度の平均得点は 2.43 であった。男性と女性で平均得点に違いがあり、女性 (1.48) に比べて男性 (3.14) で有意に高かった。男女別に

表2 AOK 孤独感尺度の平均得点 (平均値±標準偏差)

		男性	女性	全体
全体	<i>F</i>	3.41±3.22 (322)	1.48±2.34 (337)	2.43±2.96 (659)
		79.06**		
年齢階級	65～69 歳	3.35±3.03 (107)	1.62±2.37 ( 98)	2.52±2.86 (205)
	70～74 歳	3.78±3.42 (116)	1.36±2.18 (121)	2.54±3.10 (237)
	75～79 歳	3.09±3.16 ( 99)	1.49±2.48 (118)	2.22±2.91 (217)
	<i>F</i>	1.26	0.35	0.80
学歴	高等学校以上	3.08±3.12 (243)	1.40±2.25 (274)	2.19±2.82 (517)
	高等学校未満	4.63±3.38 ( 67)	1.97±2.74 ( 58)	3.39±3.36 (125)
	<i>F</i>	12.49**	2.81	16.99**
配偶関係	配偶者あり	2.60±2.80 ( 15)	2.20±2.39 ( 5)	2.50±2.65 ( 20)
	離別	3.33±3.08 (106)	2.25±2.76 ( 64)	2.92±3.00 (170)
	死別	2.24±2.71 ( 95)	1.12±2.08 (221)	1.49±2.35 (316)
	未婚	4.62±3.46 (103)	2.02±2.57 ( 46)	3.82±3.42 (149)
	<i>F</i>	9.44**	5.21**	25.82**
一人暮らし 年数	0～4 年	3.24±3.16 ( 75)	1.17±2.13 ( 94)	2.09±2.82 (169)
	5～9 年	2.74±2.75 ( 57)	1.22±2.10 ( 59)	1.97±2.55 (116)
	10～19 年	3.00±3.21 ( 78)	1.21±1.90 ( 95)	2.02±2.72 (173)
	20 年以上	4.14±3.34 (111)	2.32±2.92 ( 87)	3.34±3.28 (198)
	<i>F</i>	3.30*	5.15**	9.43**
住居の種類	持家	2.91±3.02 (148)	1.19±2.06 (234)	1.86±2.61 (382)
	賃貸住宅	3.83±3.35 (162)	2.20±2.80 ( 99)	3.21±3.24 (261)
	<i>F</i>	6.35*	13.37**	34.12**
仕事の有無	あり	2.75±3.05 (105)	1.31±2.05 ( 86)	2.10±2.73 (191)
	なし	3.72±3.24 (216)	1.54±2.43 (250)	2.55±3.03 (466)
	<i>F</i>	6.53*	0.62	3.11
暮らし向き	ゆとりがある	2.33±2.54 ( 48)	1.00±1.84 ( 61)	1.59±2.27 (109)
	ふつう	3.19±3.15 (178)	1.25±2.16 (200)	2.16±2.84 (378)
	苦しい	4.48±3.47 ( 85)	2.53±2.86 ( 73)	3.58±3.34 (158)
	<i>F</i>	8.14**	10.11**	18.85**
健康度自己 評価	よい	2.99±3.03 (238)	1.24±2.09 (274)	2.05±2.71 (512)
	よくない	4.70±3.42 ( 83)	2.47±2.99 ( 62)	3.74±3.42 (145)
	<i>F</i>	18.32**	14.63*	38.95**

( ) 内はサンプル数

*F*は1要因分散分析による\**p*< .05 \*\**p*< .01

基本属性との関係を見てみると、男性では年齢階級以外の基本属性で違いがみられ、学歴が高等学校未満の者、未婚の者、ひとり暮らし年数が20年以上の者、賃貸住宅に住んでいる者、仕事なしの者、暮らし向きが苦しい者、健康状態がよくない者でAOK孤独感尺度の平均得点が高かった。一方、女性では年齢階級、学歴、配偶関係では違いがみられず、ひとり暮らし年数が20年以上の者、賃貸住

宅に住んでいる者、暮らし向きの苦しい者、健康状態がよくない者で AOK 孤独感尺度の平均得点が高かった。

#### 4. ひとり暮らし高齢者の孤独感に関連する要因

階層的重回帰分析の結果は表 3 のとおりであった。全体および男女別の分析において、第 1 段階と第 2 段階の間で、それぞれ有意な寄与率の増加（全体.179, 男性.237, 女性.172）が認められた。また、第 2 段階の最終分析モデルにおいて、重相関係数はいずれも有意であり、投入された独立変数全体で説明できる従属変数の分散の比率（自由度調整済み  $R^2$ ）は、それぞれ全体 37.7%, 男性 36.1%, 女性 23.8%であった。

すべての変数を投入した第 2 段階で有意な関連が認められた変数は、全体の分析では、性、学歴、仕事の有無、健康度自己評価、近所づきあいの程度、別居子家族と会う頻度、友人と会う頻度であった。すなわち、男性、学歴の低い者、仕事なしの者、健康状態がよくないと評価した者、近所づきあいなしの者、別居子家族および友人と会う頻度が少ない者で AOK 孤独感尺度の得点が高かった。同様に、男性の分析では、学歴、健康度自己評価、近所づきあいの程度、別居子家族と会う頻度、友人と会う頻度で有意な関連が認められ、学歴の低い者、健康状態がよくないと評価した者、近所づきあいなしの者、別居子家族および友人と会う頻度が少ない者で AOK 孤独感尺度の得点が高かった。また、女性の分析では、ひとり暮らし年数、友人と会う頻度で有意な関連が認められ、ひとり暮らし年数の長い者、友人と会う頻度が少ない者で AOK 孤独感尺度の得点が高かった。

#### 考 察

今回、AOK 孤独感尺度を用いて、都市部に居住しているひとり暮らし高齢者の孤独感について測定し、孤独感に関連する要因を検討した。この尺度は 40 歳～79 歳の中高年の男女を対象に実施された研究（安藤他, 2000）において、その信頼性が確認されていた。しかし、他のサンプルや年齢層のデータでは確認されていなかったため、今回のデータで検討したところ、 $\alpha$  係数は .89 であり、十分な信頼性が再度確認された。この結果は、この尺度が高齢者の孤独感の測定に際しても有用な道具であることを示すものである。

ひとり暮らし高齢者の AOK 孤独感尺度の平均得点は男女で大きく異なっていた。安藤他（2000）が示した都市部に居住する中高年のデータのうち、高年齢層である 60～69 歳（男性 1.80, 女性 1.16）、70～79 歳（男性 1.99, 女性 1.14）と比較すると、男性の平均得点（3.14）は非常に高い数値であった。この結果は、ひとり暮らしの男性高齢者が孤独を強く感じていることを意味している。回答者の特徴で示したように、男性には未婚者と離別者が多く、家族がいないことや元の家族との関係がうまく維持できないこと、近隣などとの関係も疎になりがちであると考えられる。ひとり暮らしという居住形態そのものよりは、ひとり暮らしの原因やそれに至る過程に孤独を強く感じさせる原因があると思われる。

関連要因の全体の分析において、すべての変数を投入した第 2 段階で、有意な関連が認められた基本属性は性、学歴、仕事の有無、健康度自己評価であった。性が孤独感に及ぼす影響は他の変数の影響をコントロールしても強く、先に示したように、男女別の孤独感尺度の平均得点において差が見

表3 都市部のひとり暮らし高齢者における孤独感の関連要因：階層的重回帰分析の結果

変数	全体 (n = 587)			男性 (n = 279)			女性 (n = 308)		
	標準偏回帰係数 ( $\beta$ )		相関係数 ( $r$ )	標準偏回帰係数 ( $\beta$ )		相関係数 ( $r$ )	標準偏回帰係数 ( $\beta$ )		相関係数 ( $r$ )
	第1段階	第2段階		第1段階	第2段階		第1段階	第2段階	
性 (→男性)	.281**	.164**	.329**	—	—	—	—	—	—
年齢	-.011	.029	-.033	.018	.063	-.009	-.046	-.005	-.030
学歴：就学年数	-.115**	-.083*	-.145**	-.163*	-.117*	-.247**	-.056	-.049	-.114*
配偶関係 (→離死別・あり)	-.145**	-.046	-.245**	-.208**	-.048	-.233**	-.022	.011	-.113
ひとり暮らし年数	.041	.017	.198**	-.018	-.050	.143**	.158*	.121*	.192**
住居の種類 (→持家)	-.065	.031	-.205**	-.002	.095	-.100*	-.160**	-.070	-.198**
仕事の有無 (→あり)	-.075	-.069*	-.072*	-.091	-.085	-.125*	-.079	-.066	-.072
暮らし向き (→ゆとりがある)	-.055	-.002	-.134**	-.057	.023	-.143**	-.059	-.025	-.113*
健康度自己評価 (→よい)	-.146**	-.113**	-.226**	-.197**	-.162**	-.244**	-.092	-.064	-.161**
近所づきあいの程度 (→あり)		-.139**	-.234**		-.206**	-.257**		-.011	-.074
自治会などへの参加 (→参加している)		-.066	-.233**		-.065	-.219**		-.090	-.207**
グループ活動への参加 (→参加している)		-.036	-.285**		-.055	-.254**		-.012	-.227**
別居子家族と会う頻度		-.133**	-.306**		-.211**	-.275**		-.093	-.207**
友人と会う頻度		-.370**	-.510**		-.369**	-.494**		-.381**	-.447**
重相関係数	.460**	.626**		.392**	.625**		.315**	.520**	
自由度調整済み $R^2$	.200	.377		.129	.361		.075	.238	
$\Delta R^2$		.179**			.237**			.172**	

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$

られたこととも符合する。先行研究では、性差が見られる場合には、男性で孤独感が強いという知見が得られている (Borys & Perlman, 1985)。男性の孤独感が強いことの理由として、男性は職業生活において維持してきた友人を退職後に失うことが多く、女性よりも友人などの他者との関係が疎になり、女性よりも孤独感が強くなると説明されている (Peplau & Perlman, 1982)。性差に関する本研究の結果は先行研究の知見と一致するものであったが、ひとり暮らし高齢者の場合は複雑な要因が絡み合って性差が生み出されているかもしれない。量的な研究では明らかにできない側面を質的な研究で探究する必要があるだろう。孤独感との関連が認められた学歴(就学年数)と仕事の有無は社会経済的地位を示す変数といえる。すなわち、社会経済的地位の低い者では孤独感が強いというのが本研究の結果であり、安藤他(2000)の知見と符合していた。社会経済的地位は個人が有する社会生活における対処資源の多寡を示しており、社会経済的地位の低い者はその基盤が脆弱であり、対処資源が少ない。このため、人との関係においても縮小せざるをえないこともあり、孤独感を強くする要因になると考えられる。まさに、孤独感を生み出す社会的な背景を示唆する結果である。健康度自己評価は精神的・社会的健康よりも、身体的健康をより多く説明するものであると杉澤(1993)は報告している。健康度自己評価に関する本研究の結果は、健康状態がよくない者で孤独感が強いというものであり、孤独感が身体的健康により強く影響を受けることを示していた。社会関係に関する変数で有意な関連が認められたのは、別居子家族、近隣(近所づきあい)、友人との関係のあり様をとらえたソーシャル・ネットワーク変数であった。これらの結果は、長谷川他(1994)が報告した別居子、近隣、友人・知人の3種類のソーシャル・ネットワークが高齢者の孤独感に対して有意な関連を持つという知見と同じであった。また、ソーシャル・ネットワーク変数の中で、友人との関係が孤独感に最も強く影響( $\beta = -.370$ )しているのも同じであった。男性の分析では、仕事の有無を除いて、これらのソーシャル・ネットワーク変数を含めて有意な関連が認められた変数は全体の分析と同じであった。一方、女性の分析では、ひとり暮らし年数と友人と会う頻度の2つの変数だけであった。男女で関連する変数に違いがあるものの、共通して関連が認められた変数は友人と会う頻度であり、まさに、選択的で互酬的である友人関係の多寡がひとり暮らし高齢者における孤独感の低減に大いに寄与(男性  $\beta = -.369$ , 女性  $\beta = -.381$ )すると指摘できる。

今回はひとり暮らし高齢者に限定して調査を実施したので、高齢の夫婦のみ、子どもの家族と一緒に住んでいる三世代などの他の居住形態と比較できなかった。今後は高齢者を対象とする規模の大きなサンプルにより、居住形態別に孤独感の差を詳細に検討することが必要であろう。

本研究の調査にご協力いただきましたひとり暮らし高齢者のみなさま方に深く感謝申し上げます。

本研究は、日本学術振興会の科学研究費助成事業・学術研究助成基金助成金(基盤研究C:被援助志向性が低い高齢者への支援方略に関する研究, 課題番号:26380671, 研究代表者:安藤孝敏)を受けて実施された。

## 文 献

安藤孝敏・長田久雄・児玉好信 2000 孤独感尺度の作成と中高年における孤独感の関連要因 横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅲ(社会科学) 3, 19-27.

Borys, S., & Perlman, D. 1985 Gender differences in loneliness. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 11, 63-74.

- 藤原武弘 2012 独居高齢者の孤独感—その要因と支援 公衆衛生, **79**, 693-696.
- 長谷川万希子・岡村清子・安藤孝敏・児玉好信・古谷野亘 1994 在宅老人における孤独感の関連要因 老年社会科学, **16**, 46-51.
- Larson, R. 1978 Thirty years of research on the subjective well-being of older Americans. *Journal of Gerontology*, **33**, 109-125.
- 舛田ゆづり・田高悦子・臺有桂 2012 高齢者における日本語版 UCLA 孤独感尺度 (第3版) の開発とその信頼性・妥当性の検討 日本地域看護学会誌, **15**, 25-32.
- Peplau, L.A., & Perlman, D. 1982 *Loneliness: A sourcebook of current theory, research and therapy*. New York: John Wiley & Sons. (ペプロロー L. A.・パールマン D. 加藤義明 (監訳) 1988 孤独感の心理学 誠信書房 東京)
- Russell, D. D., Peplau, L. A., & Cutrona, C. E. 1980 The revised UCLA loneliness scale: Concurrent and discriminate validity evidence. *Journal of Personality and Social Psychology*, **39**, 472-480.
- Russell, D. W. 1996 UCLA loneliness scale (version3): Reliability, validity, and factor structure. *Journal of Personality Assessment*, **66**, 20-40.
- 杉澤秀博 1993 高齢者における健康度自己評価の関連要因に関する研究—質的・統計的解析に基づいて— 社会老年学, **38**, 13-24.

## Correlates of loneliness among the elderly living alone in an urban area

Takatoshi Anod<sup>1)</sup>, Takashi Koike<sup>2)</sup>, Tomoya Takahashi<sup>3)</sup>

1) College of Education and Human Sciences, Yokohama National University

2) College of Humanities and Sciences, Nihon University

3) Graduate School of Environment and Information Sciences, Yokohama National University

**Objectives** : The purpose of this study was to assess loneliness in the elderly living alone in an urban areas using the AOK Loneliness Scale and to investigate factors related to loneliness.

**Methods** : Data were obtained from 1,620 elderly living alone in Yokohama city. Survey items included the AOK Loneliness Scale, basic attributes, health status, and social relationships including participation in organizations, among others. The mail survey was carried out and completed for 671 (41.4%) of the sample.

**Results** : Cronbach's coefficient  $\alpha$  of AOK loneliness scale was .89, which reconfirmed its reliability. Results of hierarchical regression analysis indicated that scores of AOK loneliness scale were high in following participants: men, those with a low educational level, those without a job, those in unhealthy conditions, those without relationships with their neighborhood, and those with a low frequency of meeting friends, or children's families that were living separately. Gender based analysis indicated that the frequency of meeting friends was correlated in men and women.

**Conclusions** : The above results indicate that causes and processes of living alone have made people feel very lonely. Furthermore, the number of selective and reciprocal friends of the elderly living alone was related to loneliness.

**Key words** : loneliness, elderly living alone, correlates, social network